

12-17歳の大うつ病性障害患者に対する第一選択薬としてのescitalopramの臨床的有用性に関する後方視的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大下, 隆司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31546

主論文の要約

12-17 歳の大うつ病性障害患者に対する第一選択薬としての escitalopram の臨床的有用性に関する後方視的研究

東京女子医科大学精神医学教室
(指導：石郷岡純教授)

大下 隆司

東京女子医科大学雑誌 第 86 巻 第 E1 号 E67 頁～E72 頁（平成 28 年 1 月 31 日発行）に掲載

【目 的】

Escitalopram は海外では思春期大うつ病性障害に対する有効性の報告があるが、本邦においては臨床有用性を検討した報告が無い。本研究は、escitalopram を 12-17 歳の思春期大うつ病性障害患者に第一選択薬として用いた臨床上的有用性について、不安症状への効果も併せて検討することを目的とした。

【対象および方法】

2013 年 1 月から 2015 年 3 月までの期間に、東京女子医科大学病院心身医療科および代々木の森診療所児童精神科を受診した ICD-10 の F32、F33 に該当する 12-17 歳の大うつ病性障害患者のうち、抗うつ薬服用歴がなく、初めて escitalopram で治療された患者を解析対象とした。治療記録から、escitalopram の用量、有効性および安全性、併用薬、登校状態について検討した。有効性の評価は、投与開始時、1、2、4、8、12 週後に記載された Hamilton's Rating Scale for Depression 17 items (HAM-D17)、Hamilton Anxiety Rating Scale (HAM-A)、Clinical Global Impression of Severity (CGI-S) を用い、開始時に対する各評価時点の効果を検討した。開始時の不安症状の重症度による効果の違いを検討するため、HAM-A 総スコアが 18 以上を重症群、18 未満を中等症群と定義、HAM-D17 $\leq$ 7 を寛解として各群における寛解率を比較した。安全

性は治療記録に基づいて評価した。

【結 果】

該当した 57 例中、53 例（男性 20 例： 15.4 ± 1.4 歳、女性 33 例： 15.9 ± 1.1 歳）を有効性評価対象とした。29 例が開始時に不登校だった。12 週後の escitalopram 投与量は 15.4 ± 5.2 mg/日であった。投与により各評価尺度の総スコア（投与開始時、12 週後の順）は、HAM-D17： 22.8 ± 6.7 、 7.0 ± 7.1 、HAM-A： 25.6 ± 6.8 、 6.3 ± 6.4 、CGI-S： 5.1 ± 0.9 、 2.1 ± 1.2 と有意に改善した。HAM-D17 と HAM-A の改善率の継時的変化は、1 週後から 4 週後の時点までは有意差が認められたが、8 週後以降は有意差が消失した。12 週後の寛解率は 69.8%であった。不安症状の重症度群における寛解率（64.4%）は中等症群（100%）に比して有意に低かった。不登校例は開始時の各評価尺度の総スコアが有意に高く、12 週時の投与量も有意に多かった。有害事象は 56 例中 17 例に 22 件認められ、有害事象を理由に初回以降 3 例が服用を中断したが、それ以外は軽度で特に治療は要さず、投与期間中に症状は消失した。

【考 察】

不安重症群は中等症群に比して寛解率が有意に低かったことから、難治化の要因として重症な不安が考えられる。大うつ病性障害の治療に関わる escitalopram の投与初期において、抑うつ症状の改善に比し不安症状の改善が大きかったことから、不安症状の改善が抑うつ症状の改善に先行する可能性が示唆された。このことは、笠原が提唱した自然なうつ病の回復過程を支持する。

【結 論】

Escitalopram の 12－17 歳の大うつ病性障害に対する有効性と安全性が示され、本邦における第一選択薬となる可能性が示唆された。